

---

教養科目・専門関連科目

金城 芳秀

---

教育及び実践の課題

---

初年次教育科目の「看護大学ゼミナールⅠ」では、グループワークの方法・内容（身近なポジティブ deviance を探そう）を継続して工夫してきた。学習ガイドとして配布する「看護大ゼミノート」では、個人課題とグループ課題の内容と方法を更新しながら、時間管理と目標管理を促している。今回、グループワークの一つとして、学生と教員を招いて「勉強会」を実施する、挑戦的な課題を設けた。その結果、達成感を得たグループもあれば、実施困難感を訴えたグループもあり、学習課題の認知的な過負荷が顕在化した。

---

活用した論文の概要

---

Clark & Fey (2020)では、学習者のストレスと不安を最小限に抑え、学習を最適化できる対話戦略が紹介されている。この戦略とは、PAAIL と Basic Assumption である。PAAIL とは、Preview、Advocacy、Advocacy、Inquiry および Listen から構成されるコミュニケーション戦略であり、P→A→A→I→L の順で対話を展開することにより、シビリティなコミュニケーションが実現できる。Basic Assumption とは「○○○の活動に参加するすべての人は、知的で能力があり、ケアに最善を尽くし、改善したいと考えています（○○○は組織名を挿入）」という意思表示であり、組織活動の共通認識を図る宣言ともいえる。この PAAIL と Basic Assumption は、学習者の認知バランスを整え、学習パフォーマンスを高め、ひいては安全な患者ケアに帰結する、根拠のある戦略とされた。何も戦略がなければ、学習者は認知的に過負荷となり、この状態がインシビリティを引き寄せ、心理的安全が損なわれ、ストレス状態に置かれ、さらに認知的負荷が増加して悪循環が形成される、とのモデルが提示されている。

---

教育及び実践への活用

---

コロナ禍に伴い、PAAIL の活用は臨機応変な形となり、授業時間も区切りが外れ、切れ目のない学生対応となった。これまでの週・グループ単位での「報告・連絡・相談」メールは個人単位に切り替え、寄せられた不安や疑問に個別対応するとともに、修正可能な内容は学生および教員間で共有した。学内で授業が実施できた期間は、「勉強会」の好機であったが、グループによってはオンラインでの「勉強会」に踏み切り、学生も教員も初の試みとなった。最終プレゼンテーションとして、動画の作成と相互評価を求めたことも、これまでにない負荷となった。にもかかわらず、多くの学生が「勉強会は残すべき」と好評価した。おそらく PAAIL 戦略だけでなく、教員 4 人（1 教員当たり 4 グループ、1 グループ学生 5 人）の丁寧な対応がシビリティな教育学習環境の形成につながったと思われる。

---

参考文献

---

Clark C.M., Fey M.K. Fostering Civility in Learning Conversations: Introducing the PAAIL Communication Strategy. Nurse Educator 45(3):139-143, 2020.

---